道乃棧

全

特41
481

東京圖書館

| | |
|---|---|
| 函 七二 | 門 勢 |
| 架 一 | 部 四一 |
| 號 一 | 類 二 |

014648-001-7

特41-481

道乃棧

星島 良平／述

M11

ABB-1080

特41
481

東京圖書館藏

星島良平講
野崎在善記

# 道乃棧

全

東京圖書館藏

# 道乃桟

大講義　星島良平　講義
權少講義野崎在善　筆記

宗忠神〔御分心〕と傷めあり〔と仰せられ〕たり〔御分心〕ハ御道詞で心の事あり日神の御心と分て賜ひし大切なる心と云義あり〔傷めあり〕とハ腹を立て物を苦しゝ様ま〻を云ふ扱て宗忠神御分心と仰せらるゝ時の心ハ身ま對しゝる御詞て心と魂と合ておかせ

る〻あり御講話より各の体中より暖氣の伺るゝ日神より受て具へたる心あり又心ハてゞるゝと云義よりて日神の御陽氣がこりてゞりて心とおるゝと見へゝり御詞の如く心と申て別より一つの奇妙不思義なる物が身より具りて居より非ず彼の日神の暖氣ありぬくりの有る間ハ生て心といふもの有り温氣う去まい泥塑人も同様あり其温暖の氣ハ鼻と口より出入まる息あり息ハ往来よて日神の御陽氣う大天地より遍満

て居るを吸てい呼きあるきてい出そひ温暖の御陽氣が往来して居る間身よぬくりりが入て活て身が働りまし知覚をあるを是とさ志て心と云ふ夫と區別て申せバ心と云氣と云魂と云へどもつゞまる處ハ彼の温氣が去まば死で志まふあり鳥獣も魚貝も草木も悉皆日神の御陽氣と吸て其物相應より温暖氣と具へて生栄てまあるゝとあり梅より鳴ゝ鶯水よすむ蛙の声まで面白ゝ樂む音声をふゝみ木草も枝葉をひらき

花さくを見るハ自らゝ勇敢面白き色をあらハすあり人間も小児の間ハ人欲ゞ少き故邪智も邪念も自らゝ少あゝ只ふらゝと笑語り勇敢陽氣ある者あるゝども生長よるゝゝゞひ多くの人と交り互よ人の悪事を見て已よ悪心ゞ増長し彼人欲よ迷ひ日夜朝暮安きこと無く生々陽和の本心ゝる御分心を傷め奉ることあり傷め奉ると心ハ形あり目よ見えず手よとゞゞず火よやけず水よぬるゝず傷むことハあるゝ苦あるゝゞも形の欲よ引らさるゝて腹を立て物と苦よする時ハ心ゞゝゝもあり心ハ直よ日神の御分心申ゝ已ゞ心をゝゝめるゝ日神の御心をゝゝめ奉るあり恐き謹むべきことあり扨て此の御詞ハ聽様ゞ大変あり昔者或同門の人親ゞ死ゝゝる御分心を傷めぬゞ宗忠神の御教あり死生ハ天命あれゞ天よ任すゞ道あり と云て平生の如く笑語りて愁傷せぬ人あり大なる取違あり父母の死を哀むハ人情にて生を好み死を

悪む本心より生ずる事あり腹と立て物を苦とする
い形より引うさまを人欲の私より出ることとして同じ様
として天理と人欲の分別あり父母の死を哀むい人
の本心人情あるとも夫より付て後や前と愚智な事の
し思て心氣を苦めると物を苦とすると云ふ人の
悪を見怒るい人情より人の本心なまども其より付て
其の人を悪し彼の人欲の我が添て心の裡が晴れや
らず愚智くし心火をしやすが腹を立ると云ふの也

免角人欲を去て腹と立てず物を苦とせぬ様とする
まば心が傷まぬあり心が傷まねば天地とつまて勇敢
浄潔く身行も自ら道より叶ありよくく身体認して
取違のおき様より有度事でこざる

足る事を知る

此い教祖の御講話より毎々あふ通し御詞より足る
事と知らぬと夫が根よりあつて悪心が増長するもの
申く可恐事あり扱て足ると云い其物の分限相応より
足て居る事まて天地のひだより何も角も足そろひ

たる物ハあり其そろはぬが自然の神支あり鳥ハそ
らとぶ支ハ速けれども地を走る支い遅し獣ハ走
る支早けれども飛ぶ支ハ蝶蜻蛉なも及バす牙ある
獣ハ角あり角ある けものハ牙あり各天よりうけ
る分限を大切に守りて天より授りたる面々の得
手ある所を以て働く故人間ほど不義不埒もせず不
自由難義もせず安心に世ぐらしふる事なれ身代
限りする雀もあり懲役をする鳥もあり夜ぐらもし
バちまうりくらかと面白さうに分限を守て居まど
も人ハ万物の霊にて心のまくに自由が出来る処う
ら我慢我欲が増長して己が身のほどを忘れ天の御
擬作を疎にするゆうにあり我が身に難有事の有
るを忘れ人の身の上の善き事ばかり見て羨む故不
足が起る也己が分限御擬作を知て面々の得手々々
を以て勉強すれハ賢愚にかゝはらす不足ハあるまも
のなり宗忠神の御講話に土龍が白き子を産した

り土龍大ニ喜び白き土龍ハ天地の間よりとびあがり善き土龍なきバ天地の間よりとびあがり善き聟を取んと思ひ色々思案せしが天地の間よりとびあがり者といへバ日の神なり何卒日の神を聟よせむと思い立ち天より上り日神よ御目通りして委細を申上げ聟よ成て玉へまと願たまむ日の神仰らるゝよ我世界を照さむとすれども雲が出て覆ひうく寸故心一杯よ世界を照す事叶ハずさすれバ我いまだ天地の間

よりふびなき者といひ云ひがしし雲と聟よとれとそ〳〵給へ土龍みをしくのごゝく雲の在家ともづ祈なき又右の如く聟よありて給ハまと頼みけまバ雲が云ふよ如何様日の神の御光も我が立ちおわの時ハ下界と照し給ふ事ハ難し併し我何程空一杯よ廣がゝむと思ひても風が吹拂ふ時ハ暫時よ吹きちらさまと我が力よ及ばず我より風と聟よせよと云けまバ又風の住家を尋

行て同〳〵聳の事を頼こけまゞバ風の云成程雲〳〵
ゐの物いもちろん我〻力で屋根も垣も吹き散せど
も祈り拝バ〻りハ如何強く吹きても動ぐで我力も
土よハ及バぬ故我より土と聳よせよと云故土ハ
向ひ聳よりて呉まゝ〻ハ土の云ハ
成程吾ハ風ぐ〻ひの物よハ動ぐまゝ祈ぐ〻も土
龍ぐ堀り穿すよハ力ばよまゞず吾より土竜と聳
よせまゝと云故矢張同類の土龍と聳を取り〻と

いふむ〻ーばゐーを引て非分の望を起す者と
戒め給へり分限を知まゝバ富貴をも羨やまず貧賤を
も憂へず天命の難有事と樂むぞ〻り有〔知〕と云ふ
ハ心の働よつまゝ重ひ守で〔知〕〔思〕〔悟〕の類凡て宗
忠神の御詞よ習ひ〻て唯一遍知るの不知のと云
たぞ〻りの事よ非ず教祖の〔知〕るゝと仰せ〻〻い
本心よ知て直よ身よ行ことゝ〻り譬ば熱湯よ手を
つけて熱ひと知れバ不覺手を引ぐ〻〻知ると云

てど身に會得する事を仰せられたり宗忠神〔天照す神の御徳を〔知る〕人い月日と共に生涯あり〕又浪風とうに鎮めを和田津神天津日を〔知る〕人の業りしと詠ど玉ふと拜讀して知るべし書物の上や理窟の上ばかりにて知い眞の知るとは言ふに非ず彼の隣の寶と数へると云譬の如く何の詮とおき事なり故によく我身に立くりて考へざれば眞の明りい入らざるこの也人の事い善と悪とが知き易けきども我が身の事よい我慢我欲がそふ故智者も学者も善悪の知きぬ人おほし恐るべき事なり童話に鼻のある男がありて女房を娶むと思へども女に嫌れ年過るまで獨身にて暮せしが同じ里に耳のない女ありしと或人媒妁して夫婦にせり初のほどは相ごくにらへやりて在しに追々自分の不具ある事い忘れて互に不足に思ふところ〻争論たへず亭主が耳あしめと云へバ女房が鼻おしまと云

てのゝしりいひ遂に喧嘩に実が入りて離別せしが
男耳なしを女房にせしことをまぢ何卒いろなしに
に好き女房をとりたく思ひ氏神へ日参し何卒好き
女房をさづけ給へと祈りしに或日氏神の御告に今
夜の子時に鳥居の下に帽子を被て立たる女あり是
を汝が宿縁の女房なり連くりて大切にせよと告
玉ひしゝば鼻なし大に悦ひてうくり日のくるを
待うけ氏神へ参詣し鳥居のあたりを彼方此方

して待ち居たるに子の時とわぼしき頃帽子を被
たる女鳥居のほとりへ行ける故すぐによりそひ
手を引てくるる男の連行方に来りぬれば是ぞ氏
神の授け給ふ女房なりと大に悦び家に伴ひ入て帽
子を取て見れば彼の耳なしなり鼻なし興をさま
し吾氏神の御告により今夜いよき女房をつれく
る筈なるに汝は何故鳥居の本に立てりやと問け
ば耳なしもいきれたる顔色にて妾も氏神の御告に

てさぞよ良ひ郎よつれうくらゝれると思て居しゝ又當
家へきまし〳〵と互ひゝ我身城うくり見て共天命と
いつきゝめて破鍋ゝ綴蓋と不足を止て夫婦あらよく
暮し〳〵と云話ある天道い自然よして不揃あるが神
事よて鼻ゝ耳ゝ御擬作あさるゝ中ゝよ其人
の分限丈ゝ足るゝ中ゝよおさまると故己ゞ分限と知ら
ぬと無上ゝ人の結構おこしばらゝゞ浦山敷あらて
足る事ゞ知ぬりのでとゞまる扨て足ることと知ると

ハ衣食住の上ゝ就て分限と知り仕合不仕合と諦め
るのゝよ非ず万支物を十分ゝ為すぎぬ七八分ゝて
扣へ二三分の生物とのこしておくと云儀ゝ足ると云
支と取違へ學問藝術の脩行産業あどの上ゝて
我ハ是丈の才器氣力不ゝあきまく此位の学問藝術
で我身の上ゝハ十分ゞやと云て勉強せずゞ或ハ我
ハ不仕合おもの故迚も思ふ様ゝハ行ずゞ只不自由
難義とせず持来りの躰代さく持潰さ祢ゞ足てい

ると云て勉強せぬ人有り此等い真の足る事を知る
と云ものゝ非ず勉強力の足らぬと云ものあり真ゝ
足る事を知ると云い天の賦与一王ふ面々の得手を
考て才力のくぎり不足あきやう勉強すると真ゝ足
る事を知と申ます呉々取違のあきやう被成度こと
でム

明治十一年七月三十日　御届
同年　八月五日　刻成

講者　岡山縣士族　星島良平
記者　同縣岡山天瀬士族　野崎在善
兼出版人
賣捌所　同縣岡山上之町平民　逸見喜三郎